

第3回神戸歴史遺産認定概要書



- 山地
- 市街地、農地ほか



※国土地理院 1/25,000 地形図をもとに作成

0 3 km

すみよしがわ すいしゃご やあと はちりょうばちてん
住吉川の水車小屋跡（八輮場地点）

所在地：神戸市東灘区住吉台地先

員数：水車小屋跡地3ヶ所（住吉川の八輮場附近）

所有者等：（所有者・管理者）国土交通省 近畿地方整備局 六甲砂防事務所
（管理者等）山田クラブ

概要

水車小屋跡地のある住吉川はいくつもの溪流を集めながら大阪湾に注ぐ、六甲山地の中では豊富な水量を誇る河川の一つである。河川敷は整備され、市民の憩いの場所として親しまれている。

明和7年（1770）の大坂に加え、摂津・河内・和泉の油稼株が認められるようになると、住吉川にあった水車が綿花・菜種の油絞りに利用されはじめ、その後酒造の精米にも活用されるようになった。寛政11年（1799）には住吉川に築かれた水車は55輮を数え、明治40年（1907）頃から酒造業の活況とともに精米水車として大正中期頃には水車80輮、白1万、従事者1千人といわれるまでに盛行した。しかし、大正後半には、酒造業の精米が電動モーターに代わったことを契機に、水車小屋は激減し、昭和54年（1979）には住吉川流域の水車小屋は姿を消した。

水車小屋の構造は、瓦葺の平屋建物であることが古写真から分かる。傾斜地を削り出した平地に建設された。屋根に水を通す木樋を配し、木樋の真下に水車、それに直行するようにいくつもの石臼を据えたものが一般的な形態であった。この水車小屋跡地には、水車小屋に伴うと考えられる平坦地と石垣が現存する。平坦地には水車小屋の水路（幅約80cm、深さ約30cm）や滝壺（幅約1m、深さ約1.8m）と考えられる石組みが残る。

今後は、地元団体により跡地内での植樹や草刈りを継続するなど、多くの人に酒造業をはじめ神戸の地場産業を支えた水車小屋の存在を周知する活動も見込まれる。

評価

かつて住吉川流域に軒を連ねた水車小屋は、現在では石垣や水路・滝壺と考えられる石組みがわずかに残るのみである。この水車は、油絞や酒造などの地場産業を支えた存在で、神戸の歴史を伝える貴重な遺構である。また、現地は国有地であり、かつ申請者である地元ボランティア団体は顕彰の思いが強く、今後も水車小屋とその歴史を伝えていくことが期待できる。

以上のように歴史的背景の裏付けや今後の保存活用が見込めることから、神戸歴史遺産としてふさわしい。

011_住吉川の水車小屋跡（八輮場地点）



位置図



概略平面図

011_住吉川の水車小屋跡（八輦場地点）



現況写真：②水路跡



写真：①現況



写真：①南端石垣？



写真：①滝壺？



写真：①滝壺？

011_住吉川の水車小屋跡（八輮場地点）



写真：②北部現況



写真：②南部西側石垣



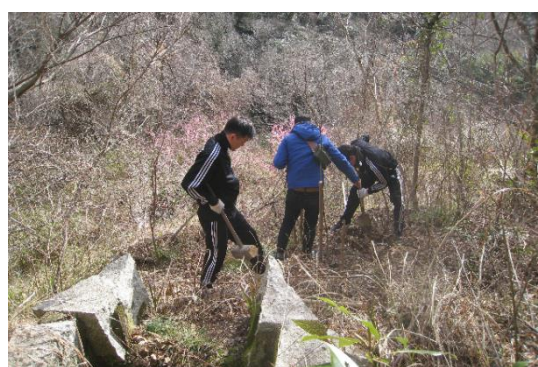
写真：③現況



写真：③西側石垣（一部崩壊）



写真：①整備作業状況

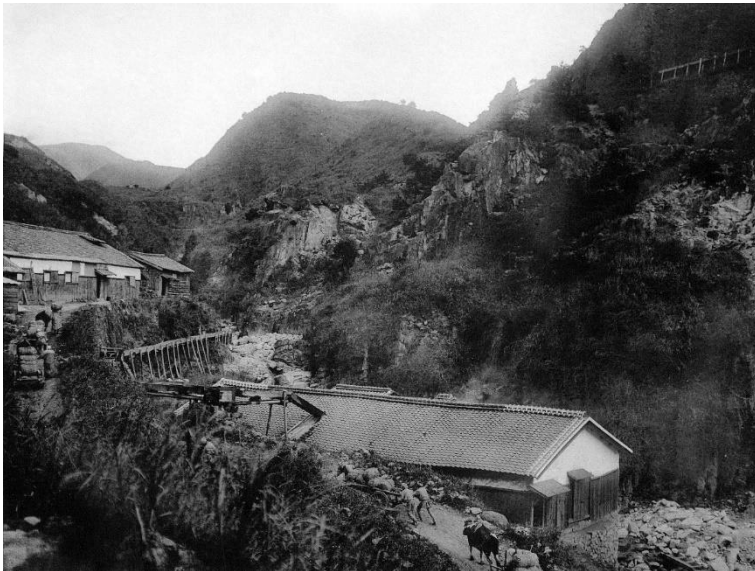


写真：②整備作業状況

011_住吉川の水車小屋跡（八輮場地点）



参考) 西谷川上流域水車小屋（住吉歴史資料館蔵）※水車小屋への導水の状況がわかる



参考) 住吉谷戎大黒岩附近（『御影の里』）（住吉歴史資料館蔵）
※現川沿いの斜面に水車小屋が建ち並ぶ様子がわかる。



参考) 水車小屋内部の様子（住吉歴史資料館蔵）

きゅうまつもり い いんほん い いんとう
旧 松森医院本医院棟

所在地：神戸市北区淡河町野瀬 492

員 数：木造 2 階建 1 棟

所有者等：所有者 個人

管理者 淡河松森医院跡みらい会議

概要

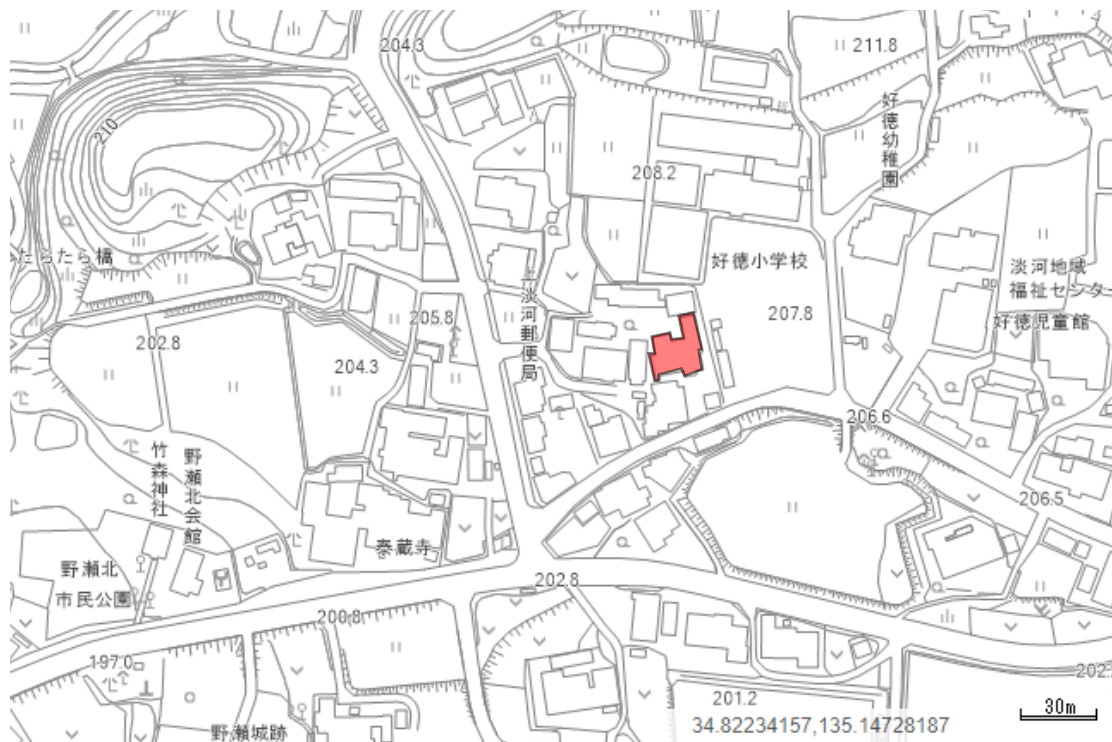
松森家は篠山藩に代々仕えた御殿医、武家で、明治 6 年(1873)廃藩置県により 13 代・正徳が美囊郡野瀬 61 番地に転居し、産科・薬局を開業、あわせて好徳小学校の教員を務めた。明治 44 年(1911)現在地(野瀬 492 番地)へ移り、松森医院を開業したと伝えられる。

旧松森医院本医院棟は、昭和 3 年(1928)1 月竣工の木造瓦葺 2 階建ての和風建築、延床面積は 287.79 m²である。施主は 2 代院長・正純、施工は社寺建築を手がけた淡河中山の板東工務店(金子組)が務めた。1 階は受付、待合室、薬局、診察室、手術室、分娩室など、医院機能を有し、玄関や応接間の格天井など手の込んだ設えである。2 階は書院造風の 4 室からなり、座敷、床の間、付書院、茶の間、大窓が設けられた欄干など豪華な設えと和風建築としては高い天井が特徴である。中 2 階には簡素な設えで天井高の低い使用人室もある。

昭和 33 年(1958)の新館竣工後も、昭和 37 年(1962)まで旧本医院棟は医院として使用された。昭和 46 年(1971)頃に 1 階を改修し、松森家が居住したが、昭和 59 年(1984)3 代院長・正美が没すると松森医院は閉鎖され、その後旧本医院棟は空き家となった。令和元年(2019)、解体直前の旧松森医院の建物群を現所有者が取得し、地域拠点施設として再生を進めている。現在、本医院棟の耐震改修工事も進められており、今後は交流施設、住居として使用予定である。

評価

旧松森医院本医院棟は昭和初期の大規模な近代和風医院建築で、手術や出産にも対応する機能を有することで、地域医療を支えてきた建造物である。良質な木材が用いられ、格天井や欄間装飾など細部まで手の込んだ造りである。竣工から 90 年以上を経過したなか、解体の危機から救われ、地域交流拠点施設として活用されることになった。かつて居住のために改修が行われ、長らく空き家であったが、現在は耐震改修工事が進められており、今後は建造物の歴史を尊重しながら、新たなかたちで管理者を中心として地域で活用をはかる意思も明確である。以上のことから、神戸歴史遺産としてふさわしい。



位置図：旧松森医院本医院棟



写真：昭和3年（1928）竣工頃



現況写真：松森医院本医院棟（正面玄関・南側）



現況写真：松森医院本医院棟（北側）



写真：1階 応接室



写真：1階 応接室



写真：1階 奥より手術室、診察室・薬局



写真：2階 座敷



写真：中2階 使用人室

しらかわおおとしじんじゃほんでんおよびおおいや
白川大歳神社本殿及び覆屋

所在地 : 神戸市須磨区白川字宮ノ西 373

員数 : 本殿 3 棟及び覆屋 1 棟

所有者等 : 所有者 : 宗教法人 大歳神社
管理者 : 白川自治会・自治協議会

概要

白川の地は古来より開けていたようで、平安時代以降には楊梅（ヤマモモ）を朝廷に献上していた記録がある。

白川大歳神社の創建年代は不明であるが、丹波国から大歳大明神を勧進したとされている。また、長徳元年（995）には、素盞鳴尊を勧進したと伝えられており、平安時代にはすでに創建されていたようである。昭和 46 年（1971）に白川台ニュータウンの開発が進むまでは神職を置かずに、「神主番」として氏子が諸事を務めていた。

明治 10 年（1877）2 月 29 日に社殿が焼失したといわれ、その後再建された社殿が現在の社殿と考えられる。（棟札等は現在確認されていない。）

社殿覆屋の中に東西に 3 社が並ぶ形で配置され、中央社殿に大歳大明神が祀られている。中央社殿は一間社春日造の柿葺き、東側社殿は一間社春日造、西側社殿は一間社流造の板葺き、覆屋は東西 4 間・南北 3 間の入母屋造銅板葺きである。

明治 10 年に焼失したのち、再建された年代は不明確であるが、社殿の建築様式からいずれの社殿とも明治時代前半期の建築年代が思慮される。また、「白川台のあゆみ」（昭和 46 年（1971）刊）に掲載されている写真は、昭和 40 年代前半以前のもので、覆屋の屋根が瓦葺きから銅板葺きに変更されている以外は同様の外観であることから、少なくとも 50 年以上前に建築された建物であることが理解できる。

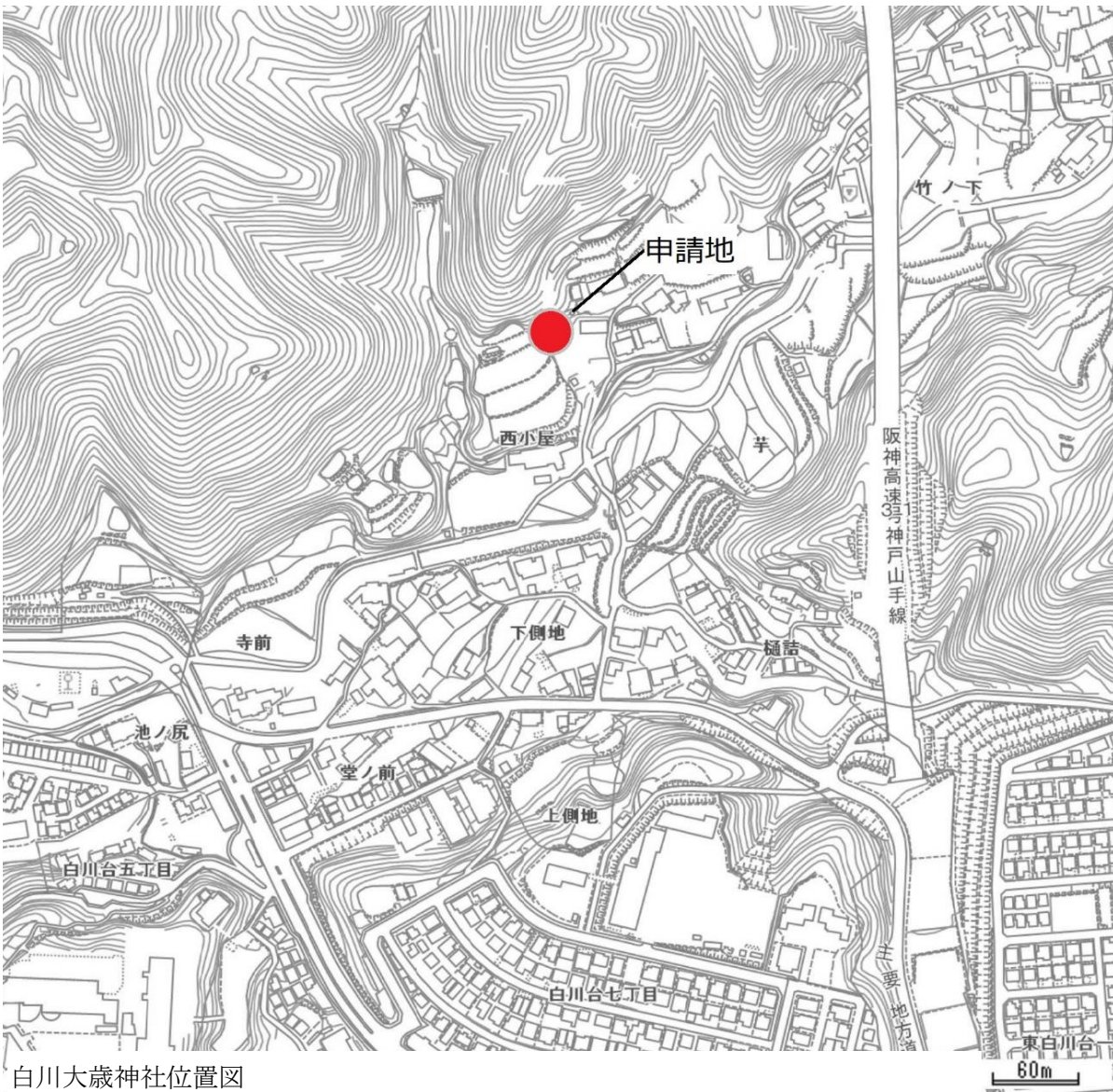
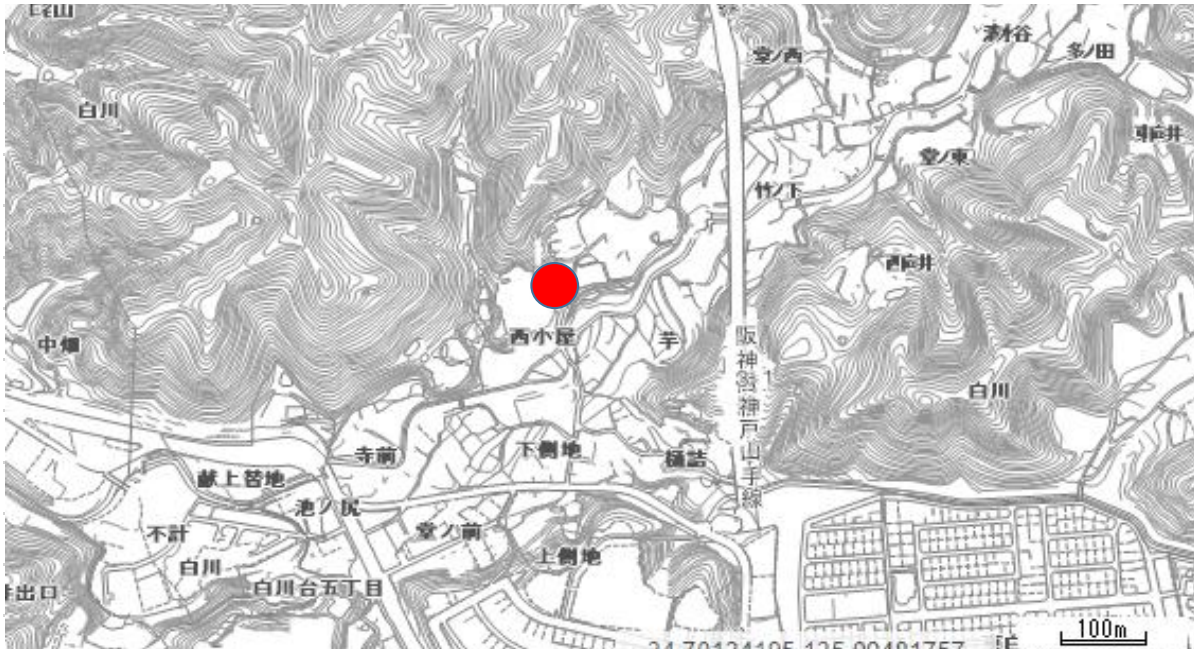
評価

昭和 46 年までは境内地に白川小学校があり、神職も置かずに氏子が「神主番」として勤めていたことは、白川大歳神社と地域が密接に結びつき、身近な存在であったことがわかる。現在は宮司がおかれているが、地域住民による「神主番」が引き続き祭礼に携わっている。

白川大歳神社は現在も、白川地域のコミュニティの拠点として、五大祭り（歳旦祭、節分祭、夏祭り、秋祭り、除夜祭）や運動会などの開催を通じて、地域住民に親しまれている。

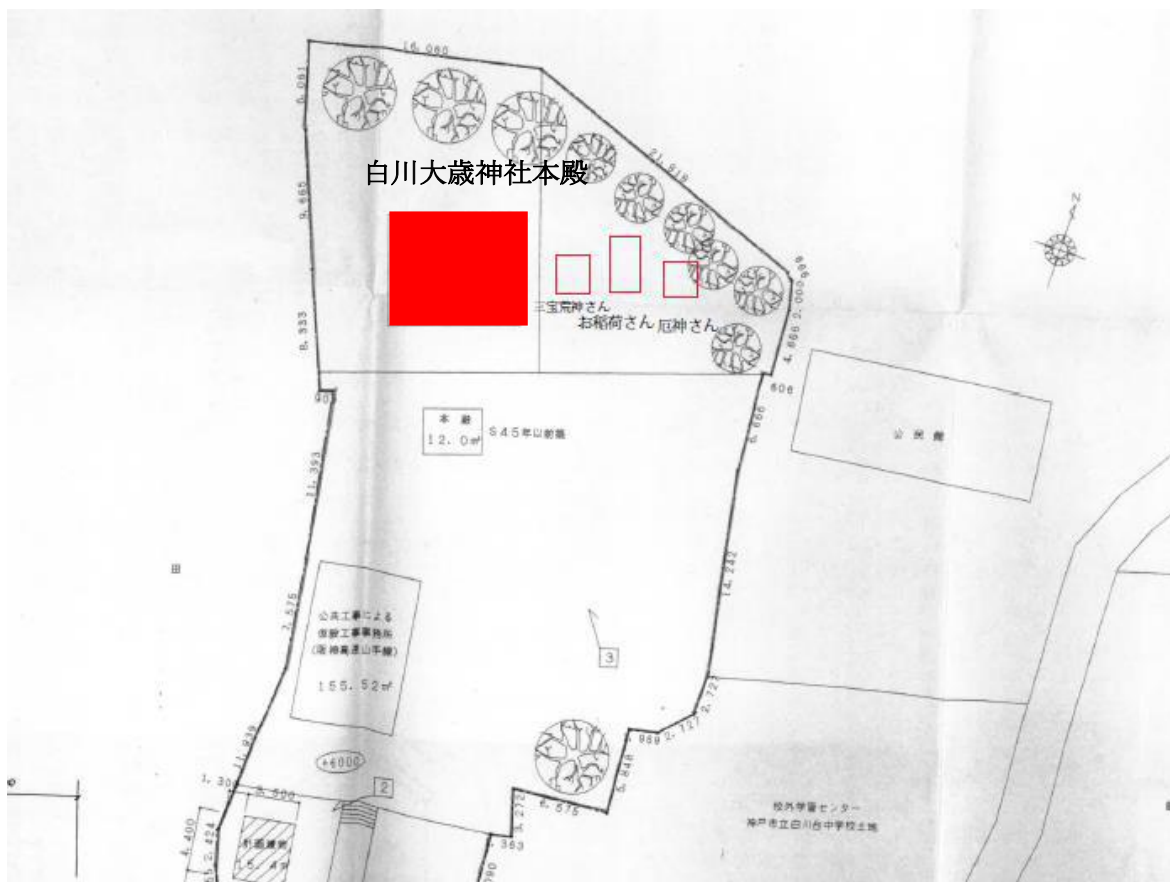
今後も白川自治会が神社を継承・保存・活用していくことを明言していることから、神戸歴史遺産としてふさわしいものと考えられる。

013_白川大歳神社本殿及び覆屋

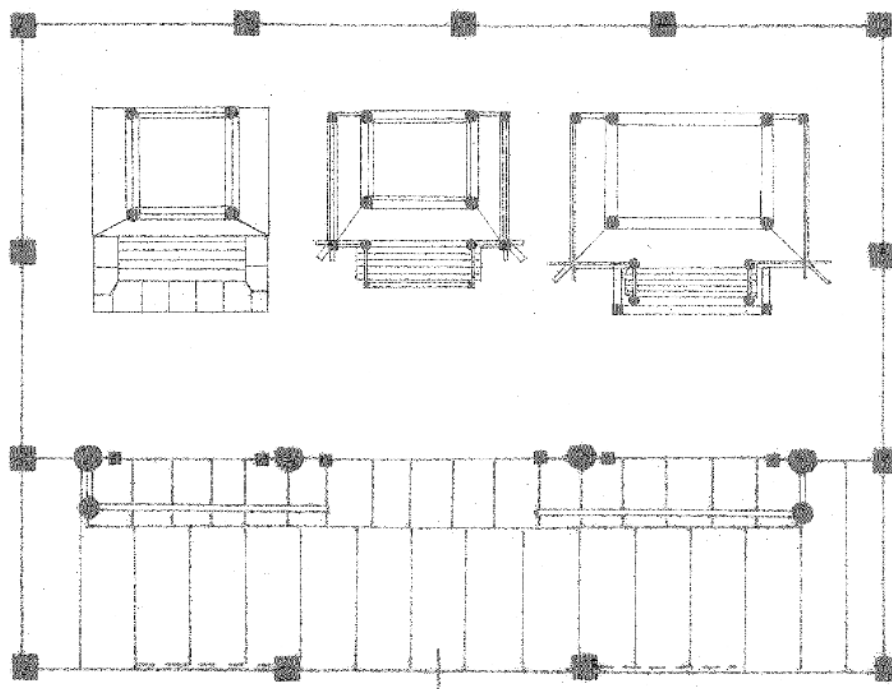


白川大歳神社位置図

013_白川大歳神社本殿及び覆屋



白川大歳神社配置図



白川大歳神社社殿配置図

013_白川大歳神社本殿及び覆屋



白川大歳神社拝殿と本殿覆屋（南東から）



昭和 40 年ころの白川大歳神社
（「白川台のあゆみ」1971 年発行より）



拝殿から見た本殿覆屋
左：昭和 47 年 5 月撮影、右：現在



白川大歳神社本殿：中央社殿（南東から）

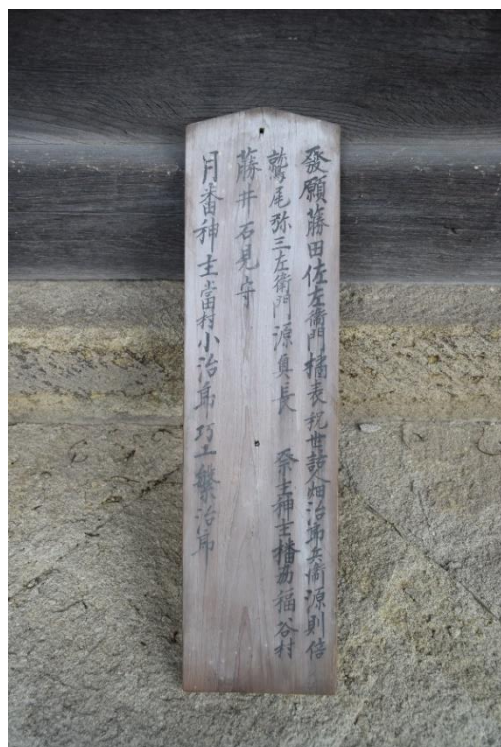


白川大歳神社本殿：東側社殿（南東から）

013_白川大歳神社本殿及び覆屋



白川大歳神社本殿：西側社殿（南東から）



本殿覆屋内で確認された棟札（幕末の年代 兵庫県神社誌では本殿は明治10年に焼失）

きゅうてらにしけじゅうたく たるみごしきやませいようかん
旧寺西家住宅 (垂水五色山西洋館)

所在地 : 神戸市垂水区五色山2丁目3-46

員数 : 1棟 (木造2階 延べ240㎡ 1階180㎡ 2階60㎡)

所有者等: 個人

概要

塩屋から舞子にかけての高台や臨海部には、明治の後半から昭和初期にかけて、明石海峡を望む風光明媚な地として、外国人や実業家の別荘が数多く建てられた。垂水、舞子間の現在の五色山にあたる高台にも洋館、和館が建てられ、良好な住宅地を形成した。

旧寺西家住宅もそのような地に建てられた洋館である。設計者及び施工者はわかっていない。当初は大阪商船株式会社(現株式会社商船三井)取締役寺西成器(てらにししげのり 1845~1930頃?)が1917年(大正6)に別邸として建てたと推定される。当初は洋館に和館が付随していたが、所有者が何度か移り、昭和40年頃に和館は解体され、洋館は玄関等が増改築されたようである。

建物の外観は赤瓦に白壁の南欧風建築の佇まいを見せ、2階大屋根は切妻屋根である。3連の縦長窓が1階と2階のそれぞれ南面中央に開かれ、2階西側にベイウインドウを備える。建物中央部付近に1基の煙突が延びアクセントとなっている。

現在は南東隅に南に開く玄関を設けているが、当初は北東部に東に開く玄関であったと考えられる。ステンドグラスや暖炉回り、階段親柱など、当初の意匠・装飾が各所に残されている。2階南西部屋のベイウインドウは明石海峡を挟んで淡路島を眺めることを意図して配置されている。現所有者はこの建物を「垂水五色山西洋館」と名付け、今後1階をイベントや音楽教室など、地域に開放して活用することを考えている。

評価

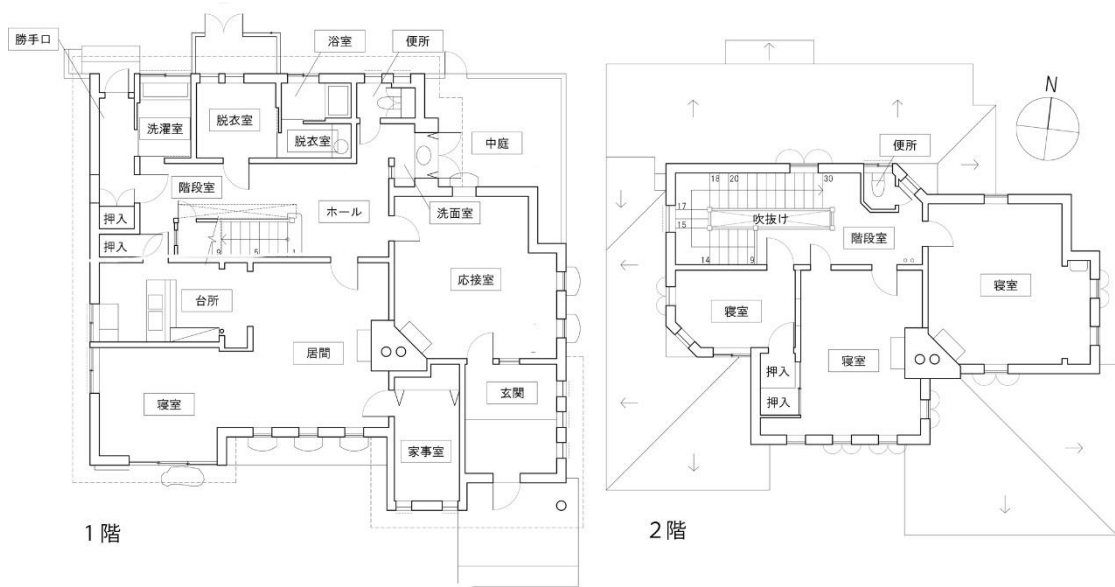
垂水から舞子の周辺には、高台の旧有栖川宮別邸(現舞子ビラ)や旧日下部邸(旧舞子ホテル)、臨海部の旧四本邸(旧垂水警察署)など和館、洋館の豪邸がいくつも建てられた。そのほとんどは既に消滅しており、この地域において当時の面影を留める唯一の洋館である。増改築は受けているが、建築当初の意匠がかなりの部分で残されている。

明治から昭和初期に当地域において実業家などによって建てられた住宅建築を知るうえで貴重な建物である。また、所有者は地域に開放しながらその保存を考えており、今後の保存活用も期待できる。

014_旧寺西家住宅(垂水五色山西洋館)



位置図



旧寺西家住宅現況平面図

014_旧寺西家住宅(垂水五色山西洋館)



現況写真 (南東から) 撮影:中尾嘉孝



現況写真 (南西から) 撮影:中尾嘉孝

014_旧寺西家住宅(垂水五色山西洋館)



現況写真 (東から) 撮影:中尾嘉孝



1階応接室 撮影:中尾嘉孝



1階居間 撮影:中尾嘉孝



1階食堂柱 撮影:中尾嘉孝



1階食堂装飾 撮影:中尾嘉孝

014_旧寺西家住宅(垂水五色山西洋館)



1階ホールと階段 撮影:中尾嘉孝



階段踊り場 撮影:中尾嘉孝



1階ステンドグラス 撮影:中尾嘉孝



1階踊り場下 灯火 撮影:中尾嘉孝

014_旧寺西家住宅(垂水五色山西洋館)



2階 中央寢室 撮影:中尾嘉孝

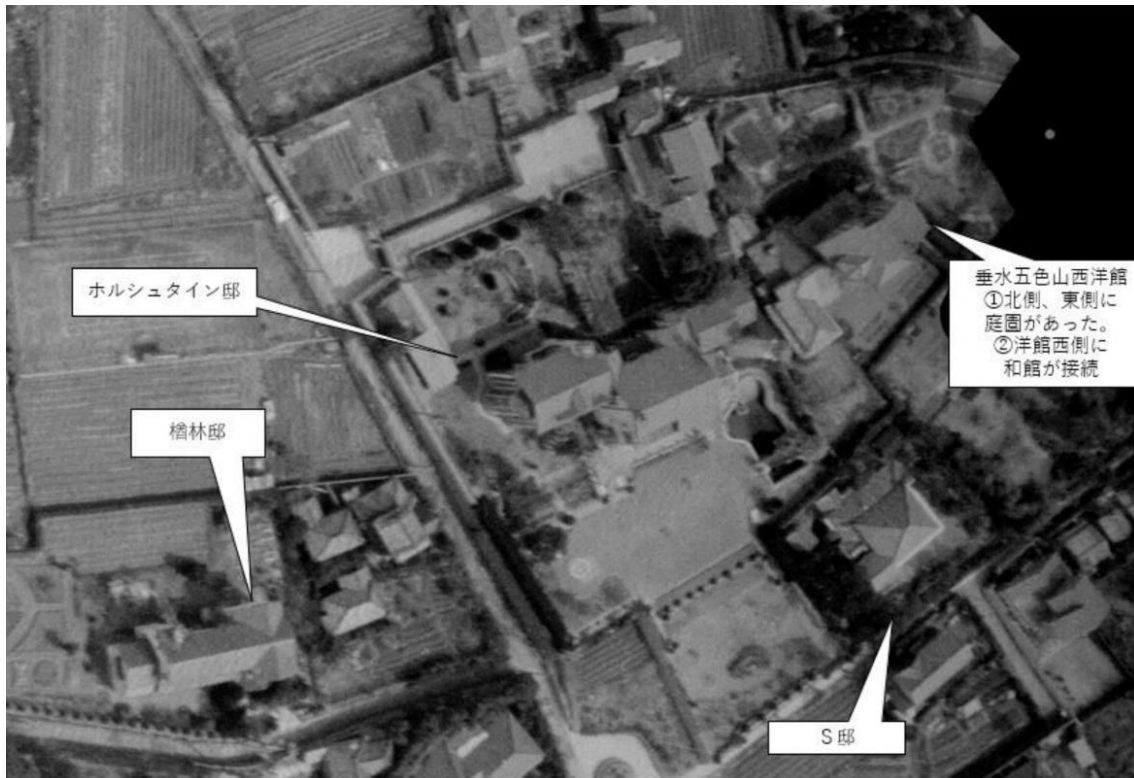


2階 中央寢室 暖炉上装飾 撮影:中尾嘉孝



2階 西寢室 撮影:中尾嘉孝

014_旧寺西家住宅(垂水五色山西洋館)



1961年 航空写真



1979年 航空写真